首輪

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
首輪

【Ｎコード】
Ｎ９６１２Ｍ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
名門女子校聖美学園に入った薫は先輩達の首に首輪があることに気付いた。それは同級生の間にも広まっていき。エロチックなお話です。

第一章

首輪

全寮制の名門女子学園として有名であった。
私立聖美学園はそうした学園として知られておりそこに入ることは名誉なこととされていた。実際に入学した小林薫もそう思っていた。
黒を基調として金色を配したその制服に身を包んで寮から学園に向かい授業を受ける。入学してすぐにそのことに恍惚となっていた。
その彼女はだ。ある時気付いたのだ。
上級生達の首にだ。あるものが付けられていた。それは。
首輪であった。殆ど、いや全ての者がそれをしている。そのことに気付いたのだ。
「ねえ」
それで入学してすぐに親しくなった紫藤菖蒲に尋ねたのだ。教室で彼女の席のところに来てだ。そのうえで彼女に尋ねたのだ。
「気になることがあるんだけれど」
「どうしたの？」
「先輩達だけれど」
こう前置きしてから言うのだった。
「何で皆さん首輪してるのかな」
「あっ、そういえばそうよね」
言われて菖蒲も気付いたのだった。
「皆さんしておられるわよね」
「あれ何でかしら」
首を傾げながら言う薫だった。
「何で首輪なんて」
「そうよね。何でかしらね」
菖蒲もそれを聞いて述べた。

「校則でそうなってるのかしら」
「そんなの書いてないけれど」
校則はもう入学してすぐに細かいところまで読んで確かめている。だからそれはもうわかっていることだった。
「一行もね」
「首輪をするとか？」
「するなとも書いてないけれど」
それもないのだという。
「けれど。首輪なんて」
「ファッションかしら」
菖蒲は首を傾げてこう述べた。
「それじゃあ」
「首輪がファッションなの？」
「世の中何が流行るかわからないじゃない」
菖蒲はこう考えるのだった。そしてそれを薫にも話す。
「だから。それじゃないかしら」
「そうかしら」
それを聞いても首を捻る薫だった。
「そんな風になるかしら」
「そうじゃないの？世の中何が流行るかわからないわよ」
またこのことを言う菖蒲だった。彼女はふわふわとした髪に大きな目を持つ小柄な女の子である。それに対して薫は彼女と比べると幾分か背が高くその髪は赤毛でショートにしている。幾分かボーイッシュな顔立ちである。スタイルは菖蒲は胸がかなり大きいが薫は尻のラインがいい。好対照な外見であると言えた。
「だからね」
「そういうものかしら」
「それによ」
ここでまた言ってきた菖蒲だった。
「うちの学校て校則厳しいじゃない」

「そうね、それはね」
「それもかなり」
このことは事実だった。名門女子学園に相応しくその校則はかなり厳しかった。さながら軍隊の如き厳しさである。
「厳しいわよね」
「だから変な格好はできないし」
「ええ」
「首輪もそれを考えたらね」
こう話す菖蒲だった。
「そんなに気にすることないんじゃないかしら」
「そうかしら」
「そうよ」
笑って薫に話す。
「気にすることないわよ。それにひょっとしたら」
「ひょっとしたら？」
「先輩達がされてるじゃない」
笑顔はそのままである。
「それじゃあ私達もね」
「するかもってこと？」
「そうじゃないの？」
こう言うのである。

第二章

「やがてはね」
「そうなるのかしら」
「まあそのうちわかることだと思うわ」
「そのうちなのね」
「そうよ、そのうちね」
菖蒲の話は続く。
「そうなるかもね」
「私もあの首輪を」
それを聞いて不思議な顔になる薫だった。彼女にとってはとても信じられないものだった。そしてその首輪のことをそれからも見るのだった。
寮は三年、二年、一年が一人ずつ部屋の中に入る。そうしてそこで共同生活を行うのである。朝早く起き規律に従って規則正しい生活を行う。それは修道院の中の様に厳しい生活である。
薫もその中にいる。そしてある日だった。ふと夜中に目を覚ますとだった。
その三年と二年の先輩達がいないのだ。ベッドの中はもぬけの殻であった。
「おトイレかしら」
最初はそう思った。しかし中々帰って来ない。だがこの時はただ長いだけだと思ってそのまま寝た。この時はそれで終わりだった。
だが暫くしてまた夜に目覚めてみるとだった。またいないのである。その時もまたトイレだと思っただけだった。
しかし三度目もだ。やはりいない。いい加減このことを奇怪に思いだした。
「何でいつも夜におられないんだろう」
そう思ってである。また菖蒲と話すのだった。

「おかしいと思わない？これって」
「夜中にいつもおられないのね」
「そうなのよ、どうやらね」
こう話すのである。
「どういうことなのかしら、これって」
「たまたまじゃないの？」
菖蒲はそのことに特に不思議に思うことなく述べた、
「それって」
「たまたまかしら」
「夜中におトイレ近い人もいるじゃない」
「ええ」
「だからそれじゃないかしら」
それではないかというのである。
「ただ単にね」
「そうなの」
「私はそう思うわ」
これが菖蒲の考えだった。
「ただそれだけだってね」
「ううん、じゃあ気にすることはないかしら」
「そうよ。ところで」
「ところで？」
菖蒲からの言葉だった。
「最近私達の間でもね」
「私達の間で？」
「一年の間でも首輪が拡がってるわよね」
このことを言うのだった。
「首輪がね」
「ああ、そうよね」
薫は菖蒲に言われてこのことにはっと気付いたのだった。
「そういえば最近」

「少しずつだけれど」
「どうしてなのかしら」
「さあ。ただね」
「ただ？」
「そういう娘って時々何かぼうって顔になるわよね」
こうも言うのだった。
「恍惚っていう感じの」
「ええ。朝の礼拝の時もね」
薫はまた菖蒲の言葉で気付いたのだった。
「そういう顔になってるわよね」
「先輩の方々もね」
彼女達もだという。
「何かそういうお顔にね」
「なってるわよね」
「どうしてかしら」
菖蒲はこのことの方が不思議であるらしい。それで言うのであった。
「これって」
「さあ。ただ」
「ただ？」
「首輪と関係あるみたいね」
このことは何となくだが察していた。

第三章

「その首輪とね」
「そうかも知れないわね」
菖蒲も彼女のその言葉に頷いた。
「若しかしたらね」
「それに」
ここで薫はさらに気付いたのだった。
「一年の間にもね」
「あっ、そうよね」
菖蒲も彼女のその言葉に頷く。
「少しずつだけれど首輪してる娘出てきてるわよね」
「それで時々ぼうっとなってね」
「何なのかしらね、本当に」
菖蒲もここで首を傾げることになった。
「あの首輪って」
「さあ。先輩達は皆さんだし」
またこのことを言う薫だった。
「とにかく何かあるのは間違いないわね」
「そうよね」
そんな話をしていたのだった。そしてある日のことだ。薫は夜遅く不意に目が覚めた。トイレに行きたくなってそれで目が覚めたのだ。
ベッドを出てそのうえでトイレに向かう。するとだった。
何か地下の方から声が聞こえてくる。苦しいような、それでいて快いような。そんな声が下の方から聞こえてきたのである。
「何、その声」
それを聞いて不気味なものを感じる薫だった。
それでトイレを済ませた後で寮の一階に下りてそのうえで地下に

行く階段なり扉があるかどうか調べた。しかし結局それは見つからずその日はそのまま眠りに戻った。
部屋に帰っても先輩達は相変わらずいない。そのことにも不思議に感じながら眠った。そしてそれの翌日のことだった。
学校に来るとだ。何と菖蒲の首にもだ。その首輪があるのだ。黒いその首輪をしてそのうえで恍惚とした顔になっていた。
薫は驚いてその菖蒲に声をかけた。そのうえで問うのだった。
「あの、何で首に」
「ああ、薫ちゃん」
菖蒲はぼんやりとした顔になっていた。そして我に返った様子で薫に応えてきた。その顔はまだ恍惚としているものが残っていた。
「おはよう」
「あんた何で首輪を」
「ああ、これ？」
「何でなの？それは」
「昨日ね」
その顔でまた言ってきたのだった。
「昨日からなのよ」
「昨日何があったの？」
「とてもいいことがあったの」
こう言うのである。
「それでなの」
「いいことって」
「ねえ、薫ちゃん」
その顔で薫にまた言ってきた。
「よかったらね」
「ええ、よかったら？」
「今夜だけれど」
彼女に静かに声をかけてきた。
「どうかしら」

「どうって」
「昨日私がしてもらったことを薫ちゃんにもね」
「私にも！？」
「そう、薫ちゃんにもよ」
こう彼女に言ってくるのである。その恍惚とした目はぼんやりとしたものだったがそれ以上に濡れて、しかも妖しい誘いを彼女に見せている。
その目でだ。薫に対して言ってくるのである。
「それをしてもらいたいのよ」
「してもらいたいって」
「今夜ね」
また時間を言ってきたのである。
「今夜だから」
「今夜一体何が」
「すぐにわかるわ」
今はこう言うだけだった。
「すぐにね」
「何なのよ、本当に」
「悪いことじゃないわ」
菖蒲はそのことは確かに話した。
「ただね」
「ただ？」
「苦しいし切ない気持ちになったりもするけれど」
薫にとってはおかしなことだった。少なくとも彼女は今はそのことを言われても理解できなかった。それで首を傾げさえしていた。

第四章

「凄く気持ちいいから」
「気持ちいいの」
「一度味わったら止められないわ」
こうまで言うのである。
「だからね。絶対にね」
「今夜ね」
「そう、今夜よ」
時間はしつこいまでに言ってくる。
「今夜だからね」
「わかったわ。それじゃあ」
とにかく約束はした。しかし一体何が行われるのかわからない彼女は怪訝な顔になるだけだった。そのうえで今日また増えた首輪をしている同級生達を見るのだった。見れば彼女達の誰もが時折思い出したように恍惚とした顔になっているのだった。
そしてだ。その今夜だ。消灯の時間が過ぎた。先輩達は自然と部屋を出て行っていた。そのことにも妙に思っていると部屋の扉を開ける音が聞こえてきた。
そしてであった。寮の外を照らす薄明かりと共に菖蒲が入って来た。寝巻き姿の彼女がだ。
彼女は部屋に入るとだ。薫のベッドのところに来て囁いてきた。
「薫ちゃん」
「あっ、うん」
彼女の言葉に応えて目を開ける。そうしてだった。
「これからよね」
「そうよ、これからよ」
微笑んで彼女に言ってきた。
「じゃあ行こう」

「ええ、それじゃあ」
ベッドから起きてそのうえで部屋を出る。そのまま菖蒲に先導されていく。そうして辿り着いた場所は何処かというとだ。
寮の一階のある壁の前だ。そこに着いたのだ。
だがそこに着いてもだ。薫は訳のわからないといった顔で自分の横にいる菖蒲に対して問うのであった。
「ねえ」
「どうしたの？」
「この壁に何かあるの？」
眉を顰めさせての問いであった。
「今夜のそのことに関係があるの？」
「あるわよ」
菖蒲が言うにはあるというのだ。
「あのね、ほらここ」
「ここ？」
「この灯りだけれど」
今は消えているキャンドルを模した灯りである。寮の中は非常灯の緑色の光だけしかない。その弱い光で照らされているだけだ。
「ここをね」
「ここを？」
「こうするの」
その下を押す。するとだった。
白い壁が左から右に開いた。するとそこから下に降りる階段が出て来たのである。
「階段！？」
「そうなのよ」
その階段を見ながら答える菖蒲だった。
「ここを降りて行くのよ」
「下にあるの」
それを聞いて見てだった。ここで薫は昨日のことを思い出した。

「あの時下から聞こえてきたのは」
「あら、漏れていたの」
それを聞いても気さくに笑うだけの菖蒲だった。
「何だ、それだったら話は早いわ」
「早いって？」
「もうすぐわかるから」
そうしてだった。階段に入った。ここで菖蒲が左手の自分の方の壁を少し押すとだった。後ろの壁が閉じた。そして階段は左右のキャンドル型の灯りに照らされた。
その灯りに導かれて下に進む。すると果てに一つの大きな、まるで大講堂の扉を思わせるような重厚な造りの扉がそこにあった。
その扉を前にしてだ。また菖蒲が薫に言ってきた。
「この中よ」
「この中？」
「そうよ、この中よ」
そこだというのである。
「この中に入ればね」
「何があるの？」
「最高の快楽があるのよ」
今の言葉はだ。とても菖蒲の言葉とは思えなかった。不気味なまでに艶のある、そんな声だったのだ。

第五章

そうしてであった。彼女が扉を開く。そのうえで薫に顔を向けて来て。

「入ろう」

「この中に？」

「ええ、入ろう」

こう言って誘ってきているのだ。

「中にね」

「中に入れば」

「全部わかるから」

断ることを許さない、そうした何か得体の知れないものすらあった。そうしてだった。

薫の足は自然と前に出た。そうしてだった。

中に入る。菖蒲に誘われるまま。そして中に入ったところで扉が閉められた。

その中は聖堂に見えた。十字架にかけられた主と黄金の祭壇がある。それが薄暗いキャンドルの形の灯りで照らされている。その中でだ。

「えっ・・・・・・」

薫はその中にある光景を見て唖然となった。何とそこに全裸の少女達がいて互いに身体を貪り合っていたのだ。その光景を見て言葉を失ってしまった。

その中には同じ部屋の先輩達もいた。それぞれ複数の少女と身体を絡め合い唇を吸っていた。しかもその相手の少女達もだ。

見れば彼女のクラスメイト達もいる。いや、見ればどの顔も彼女が知っている顔ばかりだ。誰もがこの学園の生徒達だったのである。

それを見てだ。唖然となっている彼女にだ。後ろから菖蒲が声をかけてきた。

「ねえ」
「これって一体」
「皆がやっている儀式よ」
それだというのである。
「これがね」
「儀式って」
「そうよ、皆が皆のことを互いに愛し合う儀式の場所なのよ」
後ろからの菖蒲の言葉はこのうえなく妖しいものだった。言葉それ自体に妖しい響きが宿っている、まさにそうした言葉であった。
「これはね」
「そんな、けれどこれって」
「どうかしたの？」
「女の子同士なのに」
まずはそのことを言った。その震える声でだ。
「主の御前で」
「人はどうして救われるのかしら」
また後ろから言ってきた。
「それはどうしてかしら」
「どうしてって」
「人は罪を犯すものよ」
まずはそこから話すのだった。
「そう、罪を犯すから救われるのよ」
「罪を犯すからこそ」
「だったら。罪を犯さないといけないわ」
これが今の菖蒲の言葉であった。
「だからね。今からね」
「罪を犯すの」
「愛し合う罪を」
その罪をだというのだ。
「今から薫ちゃんもね。それに」

「それに？」
「女同士で愛し合うこと」
「それがどうしたというの？」
「それは最高の快楽なのよ」
やはり今までの菖蒲の言葉ではなかった。何処までも淫靡で妖しく、底のない闇に引き込むような、そうした言葉を出してきているのだ。
「女同士だからわかることなのよ」
「女同士だから」
「薫ちゃんも」
ここで彼女の名前も言ってきた。
「それを楽しんで」
「私も」
「さあ」
その言葉と共にだ。唇を奪われた。それまで後ろにいた菖蒲が前に来ていた。そうしてそのうえで唇を奪ってきたのだ。

第六章

舌も奪われた。そのうえで絡められる。淫猥な性欲が感じられる絡みだった。それを終えてから唾液の糸で口と口をつなげたものを右手の人差し指で取ってから。そのうえで彼女に対して言ってきたのである。

「今からね」

見れば菖蒲は一糸まとわぬ姿になっていた。その豊かな胸と美しい白い肌が露わになっている。その姿で声をかけてきたのだ。

「楽しみましょう」

「楽しむの」

「この宴を」

それをだというのである。

「さあ、今から」

薫の目は虚ろなものになっていた。光すらない。そうしてその目のままふらふらと前に出る。

その服は左右から全裸の少女達に脱がされていく。そうして彼女も全裸になってだ。そのうえで菖蒲の腕の中に堕ち。快楽の中に沈むのだった。

その翌日。彼女の首にも首輪がかけられていた。そのうえで恍惚とした顔で教室の中にいた。

彼女に声をかけてきたのは菖蒲だった。今は普段の彼女の顔に戻っている。

「薫ちゃん」

「菖蒲ちゃん・・・・・・」

「今日もね」

微笑みと共に彼女に声をかけてきたのである。

「一緒に楽しもうね」

「ええ」

彼女のその言葉にこくりと頷く。
「今日も」
「どうだったかしら、昨日は」
「あんなにいいものだったの」
これが今の薫の返事だった。
「女の子同士で愛し合うことが」
「私も一昨日わかったばかりだけれど」
「それでもなのね」
「こんなにいいものだとは知らなかったわ」
「そうよね」
言葉は虚ろではあった。しかしそれでも言うのであった。
「こんなにいいものだったなんて」
「だから今日もね」
また薫を誘ってきた。
「一緒にね」
「ええ、一緒に」
「それに」
さらにであった。菖蒲はさらに言ってきたのだった。
「まだ一年生の間でこのことを知らない娘もいるから」
「そうした娘も」
「誘いましょう」
そうするというのである。
「いいわね、他のまだ知らない娘をね」
「ええ」
今度は恍惚とした顔ではなかった。微笑んで頷いた薫だった。
「それじゃあ」
「皆でお互いに愛し合うものだから」
「それが夜の儀式」
「そう、それが夜の儀式よ」
言いながらだった。薫のその手にそっと手をやってきてだ。首輪

に手を添えて言ってきたのである。
「夜のね」
「ええ、じゃあ菖蒲ちゃん」
「うん、薫ちゃん」
「今夜もね」
薫の方からの言葉だった。今度は。
「今夜も楽しく」
「愛し合いましょう」
「二人でね」
薫も菖蒲のその首輪に己の手を添えた。それから彼女の頬を優しく撫でてだ。二人で言い合う。その二人の首の首輪は今となってはこのうえなくいとおしいものになっていた。

首輪　　完

２０１０・２・７

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9612m/

首輪

2010年10月8日10時43分発行